

Title	吉田鋭雄先生を憶う
Author(s)	高木, 正一
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 105-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90430
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

あかりを川面にうつしていた。暖い大阪でも多はさすがに川風がつめたかったが、懷徳堂の教室には、小さいながらガストープが入っていた。あのころとしては、ゼいたくなものであった。

せっかくいってみて休講の掲示が出ていることもあった。學校では先生の休講はたのしいものだが、懷徳堂での休講には少々がっかりした。三年十月八日(月)、ま

吉田銳雄先生を憶う

私が先生に始めてお目にかかったのは、たしか、終戦後間もない昭和二十一、二年の頃であったと記憶する。ある日のこと、池田の古本屋の前を通りかかった私は、幾帳かの漢籍が店先に積みかさねられているのを見つけて、飛びつくようにこれを手にとつて眺めていた。店の主人も今時珍しい客と思つたのであろう。あれやこれやと親しげに話しかけてきた。歸りがけに、漢籍の出版物があったら是非知らしてほしいと頼んでおいたところ、早速數日後に連絡があった。少々なら手ばなしてもよいと言われる方があるから紹介しましょうとのこと。すぐ

吉田銳雄先生を憶う

んわるく財津先生が休講であった。しかたがない。足をのばして道頓堀へ出た。辨天座で文樂の人形淨瑠璃が引越興行をやっていた。ぶらり立見席に入った。まんのよいことに、先代の竹本津太夫の日向島をはじめからきくことができた。左傳の休講もたのしいかなである。

今となつては何から何までなつかしい。諸先生のご冥福をいのりつつ。
四一、九、二記

高木正一

その足で案内されたのが先生のお宅である。書物がとりもつてくれた不思議な縁とでも言おうか。書齋に通された私は、問われるままに、京都大學で中國文學を専攻しているむねお答えすると、この節、奇特な心がけだと、いろいろおほめや激励の言葉をいただいた上、若輩で一面識の私を、あたかも舊知のごとく、温くもてなして下さつた。謹嚴な中にも慈しみのこもつた、見るからに篤實な儒者らしい先生のあの時のお顔が、今もなお目なかに髣髴する。

以來私は、招かれたり、おしかけたりして、しばしば

先生のお宅にお邪魔したが、そのつど、いつもやさしく迎えて下さったばかりか、時にはあの食糧難の時代であったにも拘らず、酒肴の用意までもてなして下さったこともある。そうした中で、私は、懷徳堂の歴史や、これと縁りの深い先哲の事蹟逸話など、いろいろと珍らしい話をうけたまわったし、またそれを聞くのが楽しみで、御迷惑をも顧みずおしかけたものである。それらの話は、先輩諸公の御紹介に委ねるとし、私はこの際、先生について知っていることの一端を記して、その追憶にかえたいと思う。

先生がどこの御出身であったか、つい聞きもらしたが、その業は、市村盛岳翁に受けられたということである。のち大阪に出て朝日新聞社に勤めておられたが、病のため退社して、池田に閑居されることになった。先生が養痾のかたわら、家主岸上善五郎氏の援助のもとに、池田の郷土文學を調査して、世に湮没した前修先哲の事蹟を顕彰せんものと志されたのは、その頃からのことである。爾來、先生は或いは荆榛を披いて昔碑を求め、或いは舊家を訪ねて遺書を捜るなど、倦まずたゆまず、資料の蒐集に努められた。かくて最初に成ったのが「田中桐江傳」であり、池田叢書の第一編として、大正十二年一月、池田史談會より出版された。これを私は先生から

いただいて読みかえしてみたが、博引旁證、隨所に新しい事實の發見があり、興味津々たるものを覺えた。たとえば、桐江がそのかみ兵學を以て柳澤出羽守保明侯に仕えたことや、荻生徂徠、服部南郭等、當時一流の學者たちと親交のあったことなどもその一つであるが、より深い興味をひいたのは、桐江が俳聖松尾芭蕉に「莊子」の講釋をしたという逸事である。それを先生は、「老夫（桐江）武陵（江戸）に在りし時、桃青と云ふものあり、數々書齋を訪ひ、叩くに南華を以てす。歲月積む所、文義頗る熟せり。其の蘆芭蕉と名けり」という、桐江の「半時庵説」なる一篇を引いて考證しておられるが、これこそ世に隠れた逸事というべく、芭蕉研究にも一つの新しい資料となるものであらう。

ところで、先生はこれよりさき既に病も癒えて大阪圖書館員となり、ついで懷徳堂の講師になっておられたが、請われるままに、積年苦心して集められた資料を基礎とし、池田人物誌なる題目の下に、其の傳記を、原田長治主宰の太陽日報紙上に連載された。時に共に筆を執られたのが、わが郷里池田の先輩で京都大學支那哲學科出身の、今は亡き稻束猛氏であった。連載が終つたあと、太陽日報社はこれを上下二巻にまとめ、「池田人物誌」の名で出版した。何の縁あつてか、私はこの書物を戦前

に購入して、久しく書架の片隅にしまいこんでいたが、後これを取りだしてみて先生の著であることを知り、一しおなつかしい思いで読みかえしたのを覚えている。

この書物が出版されたころ、先生は命を受けて中國遊學の途につかれたという。そこで究められたのは清朝の考證學であり、晩年は特に「説文」の研究に専念されていたらしく、机上にはいつも、趙宦光の「説文長箋」や、段氏の「説文解字注」などの書物がひろげられていた。なまじつか文學書ばかり読みあさっていた私を縁なき衆生と思われてか、つつこんだ御専門の話は餘りされ

故吉田先生の裏話

懷徳堂の諸先生に於ける、私の思出となると、淺學といふより無學な小僧時代の記憶を呼び起す事になるのだから、自然其の遺徳をしのび賞讃すると云った高邁な話が出来た譯がない。只十代の目に見、肌を感じた卑近な事許り頭に残って居るのであるから、故人の名譽を傷つけ、堂友會誌を汚すことにもなりかねない事を恐縮する。其處で今回は吉田銳雄先生お一人に絞って焦點を合はせ

ず、我々若輩數名を相手に「文選」の會讀を、毎月一、二回、一年有餘にわたって續けて下さった。その會合には、きまつて奥様も同席され、會が終ると、御心盡くしの馳走にあずかって歸ったものである。その奥様までが、つい最近亡くなられたとか、教え子の母で、奥様とは懷徳堂での同友であつたという桐本祥子さんからそれを傳え聞いた私は、窓越に見る五月山の麓なる先生の舊居、北山草堂のあたりを、悽然たる思いで望んだことである。そして今もなお、先生のことを追憶する毎に、なつかしく望んでいる。

石井宗一

る。吉田先生なれば、極樂の蓮臺に腰でもかけて靈感波テレビに映して苦笑せられる位の所で勘辨して戴けるだろうと思はれるから……。

吉田先生のお宅は大阪市北區松ヶ枝町だつたと思ふ。其處は御兩親と弟妹とを加えて先生との五人暮しであつた。嚴父銳郎さんは、現代なれば劍道の花形選手として英名を世界に馳せる人だつたらうと思はれる。此の老